

Title	日本農業問題
Sub Title	Agricultural problems in Japan
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1949
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.42, No.5/6 (1949. 6) ,p.352(72)- 363(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19490601-0072
Abstract	
Notes	研究指針
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19490601-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本農業問題

島崎 隆 夫

本稿はあたらし日本農業問題の研究に従事せんとする學生諸君を直接の對象として、最近における日本農業問題の所在を明白にせんと、試みたものである。今は農業問題全領域にわたることは出来ないが、つとめてその基本的な諸問題を中心に筆をすゝめたいと思う。

一、日本農業問題を學ぶに際しての基礎的事項
經濟學の對象はたんなる生産様式一般ではなくて、特定社會の特定の生産様式の構造とその運動形態であり、狹義のそれは資本制的生産様式の矛盾の構造とその發展法則——その發生、發展および没落の法則——である。それ故に、經濟學の一分科としての農業經濟學はそれが經濟學であるかぎり基本的には右のことが妥當なるものであるが、農業經濟學は自ら独自の研究對象を有している。即ち、それは農業生産部門において成立する農業活動の過程の中に生起し、現出して來る社會經濟的諸關

係、その階級的諸性質を明白し、そこに働いている運動法則を資本主義的社會經濟機構の内部で、又それとの關係において把握することである。(註一)カウツキーはその名著「農業問題」において、試みんとしたことは既存の無數なる農業上の論著やアンケートを一つだけ新に増加することではなくして、雜多なる事實の錯綜の中を貫いていく赤き糸を暴露し、現象の表皮の下に作用し、現象を規定するところの根本傾向を闡明することであつた。而も、その場合、彼は種々雜多な農業問題を總過程の部分現象として觀察すべきことを強調している。いうまでもなく農業生産は社會的生產の一環をなしているが故に、農業問題は社會における諸問題の一つである。われわれは農業問題を考察する場合に農業問題のみを孤立化せしめてはならない。この點に關してカウツキーの指摘は教訓的である。

さて、今日の社會を支配しているものは資本主義的生產方法である。而も、それは極めて高度に發展せる獨占資本主義である。だが、資本主義的生產方法は現存社會の唯一の生産形態ではなくて、これ以外に舊き封建的生產形態の殘滓や、より新らしき高き段階の社會主義的生產形態の萌芽をも併存している。農業はこれらの環境の中にあつて比較的おくれた生産形態の下で生産が行われている。しかしそれは單に停止しているのではなくて、目覺ましい發展を、或は明白な形で或は遅々とした形でなしつつあるのであつて、われわれは農業問題を研究せんとする場合、農業が資本主義的生產方法の推移の中に免れなかつた所のすべての變化を、資本が農業を支配し、之を變革し、古き生産形態及び所有形態を存続し得ざらしめ、且つ新なる形態の必然性を生み出すか否か、又如何にして資本がこれの事をなすかを探究する事よりはじめなければならぬ點を強調したい。「人間の解剖は猿の解剖への鍵である」といわれている。わが國農村における具體的な諸農業問題を正しく理解するためには、資本主義社會における資本主義的經營の下に營まれていく先進諸國の農業生産における社會經濟的諸關係とその運動法則を把握することが決定的に重要である。

それは理論的には資本主義社會における資本主義地代の性格とその運動法則の問題である。今日わが國の農業經濟學會において資本主義地代——特に差額地代——に關して論争が行はれ、この認識が深められつつあることは特に注意しなければならぬ。

さらに、われわれが日本農業問題の所在とその特質を具體的に認識するためには、先進資本主義國たる西歐、米國等諸國における農業發展の具體的な歴史を學び、そこにおいて成立せしめられて來た古典的な農業理論^(註五)を學ぶことは有意義であつて、日本農業問題を考察する場合先進資本主義諸國の農業問題の推移との對比を忘れることなく、かゝる對比において、日本をふくめての全アジアの農業問題の特質、特に日本農業問題の深刻さが痛切にわれわれに認識されて來るであらう。

(註一) 農業を社會的生產の全機構の中に把握することを強調せる名著としてカウツキー「農業問題」(向坂逸郎譯岩波文庫がある)がある。我國の文献としては、「農業の諸問題を社會總資本の蓄積運動に關聯して考察する」ことの重要性より出發して、「農業の特殊性の研究は今日の資本主義社會の發展を具體的に把握するための「要素として」意味が存するため、「社會の總資本の蓄積運動の中に於て

農業乃至獨立小生産者が、如何なる役目を果たすか、かゝる役目を達することによつて農業乃至獨立小生産者自身の如何なる發展が必然であるか」を問うた劃期的な論著として近藤康男氏「農業經濟論——資本主義と農業」(昭和九年時潮社、戦後再版)がある。氏の據られた方法論がロースの誤謬をふくんでいることは既に指摘されているところであるが、農業問題を社會總資本の蓄積運動との關係において取りあげた點において極めてすぐれた指摘である。最近藤正夫氏による本著に對する論評がある。「資本蓄積と農業問題」(「農業問題」三號)。主として第一に農業問題を資本主義との關係においてみようとする場合、資本主義的發展を、資本蓄積即擴張再生産をロース流にとりあげることの可否如何、第二に非資本主義的な社會的環境には外國と所謂國內市場との關係の問題について論ぜられていゝる。なお、戦後において日本農業を日本資本主義の全機構の中に、而も日本農業それ自身を固定的ではなく發展的に把握せんとする努力がなされている。それは舊來の日本農業を固定的に把握する方法論に立つ舊講座派の見解を批判することが初められている。大學新聞連盟出版部編「新日本資本主義論争」日本經濟機構研究所編「資本主義論争前進のために」等参照。

(註二) K・カウツキー「農業問題」レーニン「農業におけ

る資本主義」

(註三) わが國における資本主義的地代・特に差額地代に関する論争は古い。土方、二本、高田諸氏によるマルクス經濟學批判の一部として行われた差額地代批判は猪俣、榎田、向坂諸氏による反批判を、さらにマルクス主義陣營内における論争へと發展したのであるが、戦後山田勝次郎氏の論文集「地代論争批判」(同友社刊昭和二十三年)の出版を機として再び論争が行われている。山田氏の論争の批判として、勞農派の陣營より鈴木鴻一郎氏「虚偽な社會的價值」について、向坂逸郎氏「差額地代論における問題とその解決」(以上二論文は唯物史觀(3)に掲載)鈴木鴻一郎氏「虚偽な社會的價值」か、「不當な社會的價值」か(「經濟學研究第二集」)があり、又、藤正夫氏「差額地代論止の一論點——所謂「虚偽の社會的價值」について」(「經濟學雜誌」一八の二)飯田繁氏「社會的價值の「平均原理」と「限界原理」(「經濟學雜誌」一八の二)新澤嘉芽統氏「差額地代論理解のために」地代論争の回顧(日本農業問題の所在)小池基之氏「地代論争の前進のために」——差額地代に關する山田、榎田氏所論を中心として——(「社會科學第十九號所載」)がある。山田氏はさらに自己の批判者への反批判として、「マルクス地代論の統一の把握」(理論九所載)において向坂、鈴木、飯田、小池、藤諸氏を批判

している。氏は別に「農業における資本の集積と差額地代の増進」(思想と科學第三號)及び「近代農業における資本蓄積と恐慌」(社會科學第一號)を發表している。小池氏の所説に對しては鈴木鴻一郎氏「地代論争」は「前進せしめられたか」(「經濟思潮」第十一集)がある。他に幾つかの文献解説があるが略す。今後においてもさらに論争は進められて行くであろうが、この論争の中心點は差額地代の源泉、成立、それと市場法則のメデイフィケーション、「虚偽の社會的價值」(falscher soziale Wert)の解釋を巡つてであつて、これは農業生産の特殊性を如何に考え把握するかにかゝる根本的な論點を形成するものである。今こゝではそれぞれの論點を紹介批判する機會ではないので参考文献をあげるにとめておく。

(註四) 先進資本主義諸國における封建時代より近代資本主義社會への發展をあとづけ、特にそこに發生して來たブルジョア民主主義革命の性格とその推移、就中土地變革の過程とその性格の相異を明白に把握することが日本の農業の歴史を、特に明治維新を考える上に極めて重要であつて、この點平野義太郎氏の論文集「農業問題と土地變革」(日本評論社昭和二十三年)及「ブルジョア民主主義革命」(日本評論社昭和二十三年)は貴重な研究といふべく、それ以後における諸研究の出発點をなしていると考えられ

る。さらに具體的な各國における資本主義の發生、成立、就中土地變革の問題は多くの史家により著しく進展せしめられた。イギリスにおける大塚久雄氏、フランスの高橋幸八郎氏、ドイツの林健太郎氏、松田智雄氏等の史學上の業績は極めて教訓的であり貴重である。

(註五) 古典的經濟學者——ケネー、スミス、マルサス、リカード、チュートネン等——の農業理論特に地代論は必讀のものであり、これに關しては藤正夫氏「農業經濟學序説」がある。さらにリチャード・オンズ、ロードベルタスの地代論、カールマルクスの資本論特に第三卷、剩餘價值學說史等。レーニン「ロシアにおける資本主義の發達」(十九世紀末のロシア農業問題)「農業問題とマルクス批判家」等。K・カウツキー「農業問題」リヤンチェンコ「農業經濟學」等。

二、日本農業の基礎構造と危機
戦後における日本農業問題はその問題の重要性と深さと鋭さにおいて、かつてないほどのものである。現在における日本農業問題の把握を直接の目的とするわれわれはまず第一に今日の深刻なる日本農業問題が長い間の日本資本主義の歴史的發展の中に未解決のままに累積せしめられて來た根本的矛盾の激化であり、それは今次大

戦を通じて前面に押し出されて来た世界資本主義の急激なる構造的變質をその基盤とし、その一環たる日本資本主義の構造的危機の擴大を直接の背景として露わられて来たものであり、それ故日本農業問題は世界資本主義と日本資本主義の構造的變化の過程の中にとらえらるべきである點を強調したのである。日本資本主義をふくめて世界資本主義が第二次世界大戦を経験することにより、獨占資本と國家との癒着、それを通じて獨占資本が國家權力を自己の思うままに動かし、國家權力の補強、援助のもとに廣範に勤勞大衆、中小資本を收奪し、從屬せしめ、獨占資本それ自身の活路を見出さんとしていく。即ち、獨占資本主義體制の全般的危機の激化の段階における國家獨占資本主義の發現、これこそは現段階を特殊づける最も基本的な特長であつて、現在の社會經濟の諸現象、——農業問題も勿論のこと、——は國家獨占資本主義の一環として、資本主義の全般的危機との關係において考察されなければならない。就中、日本資本主義——その成立と發展において特殊な性質を印されて来た——は戦争と國土爆撃による巨大なる損耗と破壊とによつて、その機能は全く停止せられ、これよりの恢復を巡つて國家獨占資本の演じつゝある役割と意義とは極

めて重要であつて、その最も強い收奪のために最も弱い一環を形成している農村に大きな危機の裂目をあけていくのである。なお、國家獨占資本主義は同時に社會主義のための物質的基礎をつくりつゝあること、國家獨占資本の廣汎なる人民收奪に對して、廣汎なる人民大衆の對抗が形成せられ民主人民戦線の基礎がつくり出されつゝあること、この點は忘れられなければならない。かくの如き國家獨占資本主義の理解なくしては正しく今日の農業問題を位置づけることは出来ない。

さて、わが國農村が農村景氣を謳歌し得たのは終戦直後の瞬間にして、而も部分的現象であつた。今日では既に農村には不氣味な「農村恐慌」に對する恐怖感や、「農業危機」に對する絶望感が根強く擴がりつゝある。恐慌や危機に對する根本的見解を理論的に確立すること、この問題は國家獨占資本主義の把握の下に理解されなければならない。根本的には日本農業の持つ構造的性質の故に、さらに日本資本主義の構造的性質、國家獨占資本主義への突入、その支配と收奪のうちに理解されねばならない。

日本農業の構造的危機は日本資本主義の構造的矛盾、體制的な危機の一構成要素として、その農村における

表現として考えられるのであるが、農業危機の基底をなすものは外ならぬわが國の持つ深刻なる土地問題、半封建的土地所有である。かゝる半封建的土地所有の存続に示される舊き封建性の存在の下にあつても、農業生産力は常にたゆみなく發展しつづけ、たといゆがめられた不十分な形であろうともそこには小商品生産の發展がすみめられて来た。かくて、日本農業の構造的危機はその基底に半封建的土地所有が維持されながら、なおその中に發展しつづけている小商品生産との矛盾の現れであつて、それが、而も、日本資本主義の體制的な危機の一環を形成していることである。故に、危機は半封建的土地所有の下に日本農業がつくり出しつゝある資本主義的諸關係の發展、農民層の分解、商業的農業の發達等に示さるゝが如き近代的諸關係の創出の事實を具體的に認識し、日本資本主義の帝國主義轉化、獨占階級突入との關係において明白に把握されよう。

戦後におけるインフレーションの急激なる進行の下にあつて今日農村に深刻なる不安を興える根源であり、窮乏の原因をわれわれは日本農業の持つ構造的危機として把握し、日本農業の構造的危機の性格を明白にすると共に、この日本農業の構造的危機を眞に克服し、以て民主人民的社

會の建設との結びつきを考え、その實踐的指針を採るととは今日の極めて重要な課題であり、日本農業を巡る諸問題はこのような全構造的變質のうちにその本質が問われなければならないと考える。

さて、敗戦において直接には諸外國の民主的な壓力により開始された農民解放指令——土地改革、協同組合の設定等を中心として——にもとづく諸改革は一應その實施を終了せしもの、如くである。戦後より一九四七、八年における農業問題はこの土地改革の問題に集中されていた。土地改革の歴史的意義とその評價に對する論争は激しいものであつた。今次の土地改革が實質的には分割制を取り、こゝに新にくり出された農民が獨立自營の農民として自由なる發展の展望が持ち得られるか、自由なる農民經濟の確立の根據があるか、もしそれへの展望が與えられずればその根據は何處にあるか、が問われ、來たが、今次の土地改革にはそれ程自由な獨立自營の農民への發展は展望し得ないと思われる。むしろあらゆる諸事情がそれへの發展を阻止している有様であるが如くである。それら阻止的原因の中なるものとして土地改革の不徹底、過重なる税金、強制低米價供出、等を示されて来る國家獨占資本主義の巨大なる農民の收奪があ

けられよう。既に農家再生産をも不可能にした事情は耕作放棄の現象すら生みつきあり、土地改革が終局には土地國有への志向をふくみ、具體的には人民の共同管理への歩みをつづけている有様である。かくて、人民の共同管理、土地國有等の分析がさらにすすめるべく、このためには東歐、中共の戦後における人民民主主義諸國の土地改革を學ぶことが大切であろう。

(註一) 戦後における農業問題の概観をうるためには日本農業年報、科學年鑑、農村年鑑等を見らねばならない。

(註二) 世界資本主義の構造的變質——國家獨占資本主義の問題は今日の極めて重要な問題である。構造的變質は金融獨占資本の制覇と共に——第二次大戦を通じて急激に——激化せられ、社會主義社會(人民民主主義國をふくめて)の發展との對比を著しくしている。それは資本主義體制の構造的矛盾の激化の一般的危機の發現の土臺の上で、進行しつつある戦後資本主義社會發展の不均等性の激化、戦時中を通じて金融獨占資本と國家權力との癒着の問題、國家獨占資本主義の形成、その裏である社會主義への物質的基礎の急速なる形式等を主たる内容として廣汎なる人民大衆の收奪の上に自己の活路を見出さんとしてい

(註三) 農村恐慌と農業危機。戦後の一時的な好況の幻もたちまち過ぎ去つて、農村には深刻なる恐慌状態の來襲が不安と不気味さを農民に與えつゝある。日本農業に進展しつゝあるこの恐慌状態を如何に把握し、それを如何に克服するかの方策を建設することは今日の火急の課題となつてい

る。然しながら、今日の恐慌状態は單純に資本主義本來の農業恐慌と規定し去り得ない複雑な現象をその中にふくむものであつて、それは日本農業の構造的矛盾の激化である日本農業の危機として把握せらるべきことを忘却されてはならない。農村における現今の危機状態を構造的危機として把握し、農業恐慌との相異を明白にしなければならぬ。然し乍ら、一部論者にあつては日本農業における構造的危機を問題とせず、農業危機を農村の單なる窮乏や農業恐慌の問題に解消するものもある。彼等は日本農業の構造的危機の現状を理解し得ず、過少評價している。それはあきらかに間違である。日本農業の構造的危機は基本的にはわが國の半封建的な地主的土地所有と農民の小商品生産との矛盾として、さらに獨占資本との關聯、資本主義の一般的危機との關聯のもとに把握せらるべきであらう。小池基之氏「農業恐慌、農村恐慌、農業危機」(思想一九四八、一〇) 栗原百壽氏「日本農業の發展構造」(農業危機の成立と發展)上、下(日本帝國主義講座)「國家獨占資本主義と農

業恐慌」(農業問題第七號)、農業問題第七號は農業恐慌論特集で井波卓一、川野重任、栗原百壽、馬場啓之助諸氏の論文がある。大谷省三氏「農業恐慌理論の發展のために(上)」(社會科學第一號)「農業危機と農業恐慌」(社會科學第一號)猶社會科學には他に恐慌論に關する論文がある。井波卓一氏編「農業恐慌論」の中には、大内力、井上龍夫、栗原百壽、内池庫一郎、井上晴丸、井波卓一、細谷勉夫、深谷進諸氏の農業恐慌に關する諸論文がある。座談會記事として「農業恐慌の實相とその對策」(日本農業問題の所在)に集録。

(註四) 小池基之氏「日本農業構造論」栗原百壽氏「日本農業の基礎構造」大内氏「日本農業の論理」日本資本主義の農業問題」等

(註五) かゝる土地所有制度の形式とその特質を如何に理解するかは資本主義半封建論争の中心點の一つをなしていたのであつて、この半封建的土地所有に集中的に表現されるわが國の舊き強固なる封建性の存在のために日本農業を發展の見地よりとらえることをしなかつた過去の論者はたしかに重大なる過誤をおかしているものであつて、そこには強き封建性の存在にかゝらず資本主義的・近代的關係の發展がたえず行はれつゝあることの認識が極めて大切である。他方わが國に資本主義的近代諸關係の形成に對す

る舊き封建的特質の特殊な作用と意義とを抹殺することは許されない。まして、日本農業に存在する封建性の存在を過少評價或は無視することは正しい認識とはいふことが出来ない。日本資本主義——封建論争に關しては既に戦後の新段階の意義と評價とをかねて紹介せられた論文が他にあるのでそれを参照せられたのであるが、資本主義論争は周知のごとく昭和初年における當面する革命的昂揚の時期において實踐運動の戰略戰術決定という實踐的要請より出發して、日本資本主義の構造的性質把握をめぐつて行われたいものであつて、主として二つの立場——講座派と勞農派——との間の論争として進められ、後に兩者の批判者を生み出した。これらについては内田穰吉氏「日本資本主義論争」社會經濟勞働研究所編「日本資本主義論争史」等が講座派の立場よりなされ、勞農派の立場として對馬忠行氏「日本資本主義論争史」がある。戦後における論争の意義は神山茂夫、豊田四郎諸氏により講座派批判の形で展開された日本資本主義の研究上に過去にかけていた發展の見地を補足批判し、農業における資本主義的近代諸問題の發生發展を明白に分析し、農業の資本主義化、危機克服の二つの道の問題を提起されたことである。川崎巳三郎氏「再版封建論争批判」(前衛)

(註六) 戦後に行はれた第一次、第二次農地改革についての

批判は戦後の農業問題の中心的課題であつて、而もそれは種々なる見地より華々しい論争を起したのであつた。全般についての展望は民科編科學年鑑一九四七年版農業問題等を参照のこと。

(註七) 分割的土地所有の問題と獨立自營農民の問題はヨーロッパ經濟史研究の進むにつれてその性格と意義とが明白になりつゝある。日本歴史においてこの獨立自營的農民の存在がどの程度あつたか、その性格如何、その展開が不充分なる原因は如何、という問題が現實の土地改革以後における展望との關聯において歴史的に深く追究されている。

藤田五郎氏の諸論文「日本近代産業の生成」其他、奈良本辰也氏の諸論文、經濟評論の藤田氏批判論文。

三、日本農業の若干の問題、むすび

以下断片的にはあるが問題點を指摘したいと思う。戦後における農業危機は國家獨占資本主義の強力なる收奪により益々深化せしめられてゐる。それらの中直接農業經濟に甚大なる影響を及ぼしつゝあるものは過重なる税金と強制力をもなつてゐる低價格の供出制度である。これらの過程を通じてなされる收奪は危機を益々激化せしめてゐる。

(a) 税金問題は國家財政及び地方財政の分析と相まつて、農家經濟におけるその意義が正しく問はれなければ

ならないが、今日は事情によりあまり充分なる展開を見ることがなく、批判も加えられていない。今後の研究が待望されている。

(b) 供出問題は戦時を通じ、戦後に於て更に一層強力に食糧危機の深化を基盤として押しすすめられたものである。一は供出機構そのものが、他は供出價格が、問題の中心點である。特に供出價格の問題は耕作農民にとつて誠に切實な問題であり、死活問題であるが故に、極めてそれに對する關心は強い。或は農業經濟の再生産の見地より、或は日本農業發展の見地より、供出價格決定の持つ意義が問はれ、決定せられた供出價格の是非が論ぜられるに至つたのである。

かゝる現實の問題は理論的検討として農產物價格論をやかましく論ぜしめた。農產物價格の問題は唯單に流通部面に關する問題として取り上ぐべきではなくして、その背後にあるより廣汎なる生産部面に關する諸問題が追究せらるべきである。それ故に日本の農產物價格の問題は常に價格決定の基礎となり土臺となる日本農業の基礎構造の問題と直接關聯して把握されねばならない。日本農業の生産構造の特質を如何に把握するかによつて、農產物價格決定の機構及性格を理解する上に根本的な差異

を生じて來るのは必然である。

周知のように價格問題は資本主義經濟における社會的諸關係の直接的な結節點を形成してゐる。農產物價格の問題を把握するための理論的基礎としては價格に對する一般の見解を持つことを必要とするのであつて、(工業品價格決定自由資本主義における)これを土臺として、工產物價格決定に對して農產物價格決定の特質が問はれねばならない。その時工業品價格決定の法則が、農業生産機構の特質(地代關係)によつて修正せられて行く點が正しく把握されねばならない。かくて、こゝを出發點として具體的な日本農業における農產物價格決定の機構と價格の持つ性格とそこにおける法則とが理論的に正しく把握されねばならない。問題はこの點にとどめらるべきではなくして、さらに國家獨占資本主義下において問はれねばならない。具體的にはわが國の國家獨占資本主義下において成立する農產物價格——供出價格の持つ極めて特色ある性格の諸問題がますますところなく究明されなければならぬ。

(c) 農業生産力の向上、技術の變革の問題、農村民主化を眞に徹底せしめ、豊かな農家經濟を樹立せしめるためには、それらの物的基礎である日本農業の停滯的な生

産力を變革して、飛躍的な生産力の増大が求められてゐる。そのために生産力の増大を阻止してゐる諸條件が分析され、それを排除しなければ、日本農村民主化の物的基礎たる生産力の増進は求められない。それ故に、日本農業生産力の構造が明白にされ、その變革の理論が探究されねばならない。特にこの場合、所謂「生産力論」的誤りをおかさぬように、生産關係との關聯が充分注意されねばならない。右の問題との關聯における重要な問題として農業技術の問題が戦後取り上げられて來た。それは技術の認定をめぐる技術論争をも惹き起したものである。農業經營の問題としては機械化の問題が重要である。共同經營、有害化の諸問題等がある。

(d) 農民運動。矛盾、危機の激化はそれを解決する方法を具體的な實踐にのぼらせる。明治中葉より日本資本主義の發展に伴う農村の矛盾の激化は日本農業を危機におとし入れた。この時期より日本農業の危機を救うために種々と上よりの政策が取られて來たのであつたがそれは局において絶對主義的な上よりの現狀維持的な農本主義最終的思想につながるものであつて、半封建的土地制度にはふれず、根本的解決にせまるものではなかつた。これに對して農業危機を根本的に解決し、危機を農民的に下よ

り解決せんとする運動があらゆる弾壓の下に押しすゝめられて来たのであつて、日本農民運動の持つ意義を正しく評價しなければならぬ。日本農業の構造が複雑であり、農民層の分解、形成が複雑であるため常に農民運動が分裂と混乱の中に行はれて来たのであつて、將來においてもその運動の前途には多くの困難な事情が存在している。全農民が一體となり、統一的に農民運動が展開され、特に都市労働者との同盟の地盤が日々形成されつつあるに鑑み、労農同盟の上にさらに運動は押しすゝめられて行かねばならぬ。

以上二三の問題を考えてみたのであるが、それらは皆基本的には日本農業の持つ構造的性質の故に、さらにはそれをつゝむ國家獨占資本主義との關聯のもとにとらえねばならぬであらう。

(註一) 農産物價格論について。片山内閣時代供出米價一七〇〇圓決定是非をめぐる農産物價格論への反省がすゝめられた。講座派の見解より「農産物價格における封建性」「農産物價格はなぜ價值以下か」を論じた井上晴九氏と労働派の見解より高橋正雄氏との間に農産物價格決定とその性質についての論争が行れた。農産物價格論としては、近藤康男氏「農産物生産費の研究」「轉換期の農業問題」大槻

正男氏「農業生産費論考」本位田詳男氏「農産物の價格統制」山田勝次郎氏「米と籾の生産構造」藤正夫氏「農産物價格論」等がある。最近においては石渡貞雄氏「農産物價格論序説」がある。本書は過去における農産物價格論を三つの類型に区分し、特に價值法則との關聯が論ぜられていくが、價值法則の把握の仕方に若干の疑問がある。本書に對する小池基之氏の批判がある。經濟評論(二三、八)フオラム参照。農産物價格決定の持つ特異なる性格を工産物價格決定との對比において論ぜられ、特に地代論との關聯において論ぜられた論文として小池基之氏「農産物價格の形成」(經濟學研究第二集)がある。獨占資本下の農産物價格の形成についてはふれられていない。

(註二) 農業生産力の構造に關しては大谷省三、大内力編「農業生産力論考」櫻井豊「農業生産力論」藤正夫氏「農業における生産力の問題」(經濟評論一九四九、四)等が参考となる。戦後における技術論を争は武谷星野大谷吉岡諸氏による技術規定への反省、具體的に農業問題への展開(吉岡、大谷氏)、技術史研究として特に古島敏雄氏「日本農業技術史」福島要一氏「日本農業技術論」。機械化の問題には特に古岡氏の諸著。技術に關しては拙著「農業技術論概説」が参考となる。

(註三) 農民運動史としては黒田、池田雨氏「日本農民組合

運動史」青木誠一郎氏「日本農民運動史」稻岡通氏「農民運動史」がある。二柳茂次氏「農民闘争と農業資本主義化の二つの道」(農業問題第七號)は好論文。

以上極めて簡單ではあるが若干日本農業問題の所在を指摘して来たのであるが、單に農業問題に限らず學問は現實の日々の具體的事實の解決に直接間接に關聯しているものであつて、即ち、現實の實踐的課題に答えるべき要請の下に學問は正しく發展せしめられる。學問は單なる机上の空論、議論のための議論であつてはならないのであつて、一部論者の如く正しく科學的批判をなしえぬ者は實踐的要請に對して混亂した答を與えるのみである。このことは充分心してかゝらねばならぬことである。

(註) 入門書、文献紹介書としては民主主義好學者協會農業部會編「農業理論入門」「日本農業問題入門」自由國民21所載小池基之氏稿「農業問題」等は入門書として手頃である。最後のものには多くの文献をかゝけてある。